
Sensitivo

fem10(フェムト)

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S e n s i t i v o

【Nコード】

N 1 9 8 7 Y

【作者名】

f e m 1 0 (フェムト)

【あらすじ】

財閥の子息である彼女——黒木暗が体験してきたのは、数々の肉親の死亡——…。ついに両親も亡くなり、14歳の少女が決めたのは「一人で生きていく」ということ。そんな彼女に届いたイタリアからの一枚のFAXが、少女の運命を大きく変える……。ありえないことに戸惑いながらも、暗は始めて感じる？自分の居場所？と仲間？に何を思い、何を感じるのか。……………なんて真面目なあらすじ書いてますけど、期待しないでください。いつも通りハツチヤケます。1カ月に1回更新すればいいほどのノロノロ更新です

！それをふまえた上でのご観覧をお願いしますっ！！」「作者初のリ
ボーンとかツナとか関係ないオリジナルの作品だ。生暖かい目で見
守ってくれ」b y 暗

第0話 プロローグ（前書き）

細かいこととかプロフィールてきなのは、時間の都合上後日更新したいと思いますっ！！

開いてくださりありがとうございます…っ！！

第0話 プロローグ

桜の花が咲き誇る美しく爽快なとある日。

彼女の長男、次男は不幸な事故で転落死したと言う。

セミの鳴き声が耳障りな何の変哲も無いとある日。

彼女の姉は、不幸なことに川で足を滑らせて亡くなったという。

吐き出す息が真っ白な寒い寒い冬のとある日。

彼女への誕生日プレゼントは、不幸な電車の脱線事故によって生まれた妹の遺体だったという。

——そして、枯れ葉の散るトンボが飛んでいた昨日。

オレの最後の肉親である、両親は不幸な交通事故で亡くなったんだ。

線香の香りが鼻につく。

坊さんの口から紡ぎ出されるのは、定番の「ナンマイダー」的な御経。

木魚のリズムは気持ちいいほど同じで、時たま聞こえてくる甲高い鐘の音がオレの脳を辛うじて活性化させている。

この光景を見てオレが何をしているのかわからない奴はそうそう居ないだろう。

そう。只今オレは絶賛両親のお通夜中だ。
喪服を来た形だけの親戚共。これだけ真っ黒黒黒づくしだと逆に盛大に感じる。

そして、1人だけ正座もせず後ろの壁にもたれかかっているのがオレだ。

なんつーか、ワザワザ正座する意味も無いような気がするし、足痺れるし…。

そんなワケで立ちっぱなしなわけさ。

普通ならこんなことをしたら周りが不審に思い、注意しに来るものだろうけど…。

生憎オレは普通じゃない。

——黒木財閥。

世界有数の、ものっそデカイ金持ちの1つだ。

まあ、いわゆる？石油王？ってやつ。

それで、オレの名前は？黒木暗^{くろきあん}？。

この名前は父が付けたらしいんだけど、口癖でよく言っていた『女の子は女の子らしくあれ』という言葉と矛盾してる気がする。

だっておかしいだろ。何この？黒？に？暗？にネガティブな寂しい名前。

学校の自己紹介の時、好きなものとか特技よりも名前を言うのにこれほど緊張できる人はそうそういないだろ。

もっど？光？とか？幸子？とか可愛い名前がよかった。

……え？

例えが古い？

……ほつとけよ。

で、まあよーするにオレはその黒木財閥の中心人物の娘。

両親は死んで兄弟も死んだってことは、全権力はオレにあるワケで――…。

皆何もいえないわけよ。

周りの大人どもは権力が怖いんだなこれが。

つつても、ぶっちゃけオレに権力が無くたって誰も注意はしないと思うけど。

だってさ、辺りを見回しても、涙1つ流さないオッサンに、チャラチャラした感じの男に、遊ぶ子供を注意しない母親に、インテリ系の冷たい目をした女しかない。

他も似たり寄ったりな感じで、分かりやすく共通しているところはある？皆泣いていない？ってトコだろーな。

……解説が長引いちゃったけど、まー要約すると――

「――ついに、オレも独りぼっちか」

ってことですよ。

しかも、とりあえず呟いてみた言葉は意外と大きかったのか、辺りに響いてるし。

「あ……えと……そーゆーワケじゃ……無くてな……？」

改めてみても、やっぱり誰も泣いていない。

――と。

「……黒木暗さん。静かになさってください……。悲しいのは分かりますが……」

バカな坊さんが注意してきた。

静かっところについてはいいんだけど……一箇所。

一箇所だけは訂正してもらわないとオレが困る。

「……悲しくない。それにオレは静かだった……まあソコは百歩譲って許すよ。――だけど」

「金輪際、^{こんりんざい}2度とその家名でオレを呼ぶな。それだけは許さねエ、気色悪い…」

ザワザワと親戚共がざわめく。

まあ、そりゃそうだろう。

財閥のお嬢さんが、自らの家名を？気色悪い？と言ったのだから。

「オレはもう行く。葬式まで開いてくれてありがとよ。だけどオレは帰るから」

こんなところ、居る必要もないし…そもそも居たくもない。
ここまで無駄な葬式なんかないと思う。

「待って下さい！！」

「黙れゲス」

…漫才みたい。

まっ、とにかくこの嫌な空気から一刻も早く立ち去りたいので、
とつと失礼しよう。

「じゃあな。……あっ、そーだ！ オレを殺そうだったってそーはいかないぜ？」

そう言ったオレは、夕暮れの道を駆け出した。

第0話 プロローグ（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます！

それではさようならです

第1話 ……と言つ名のプロローグ後半（前書き）

次回からはもっともつと長くしますッ！……！
プロローグなんで……これ………！

第1話 ……と言つ名のプローグ後半

「っんっん!! それにしても、いい天気だな」

今までしんみりした空気にいたとは思えない。

太陽が丸くて、オレンジで…。

夕日に照らされた塩がキラキラしていて綺麗だ。

「っーか…こんな言葉遣いしてんのお父さんにバレたら…半殺しだぜ」

——女の子は女の子らしくあれ…。

今のは、さつきも説明した？ワガママ？で？ボウジャクブジン？

だった父の口癖。

…っか…。二度も言うけど、そーゆーこと言う前にオレの名前のほう考えるよな。

女の子なのに？黒川暗？まず？くろきあん？って読み方に反対。そんなでもって名字までならず名前まで暗い感じてトコにも反対。トドメに髪色にも反対。

そのことについては、最近気づいたんだ。

——日本人なのに藍色の髪とは、どーなんだろう？

と。

……14年間生きてて気づかない自分はどーなんだ…なんてツツコマナイデクダサイ。

そうこう考えてるうちに、家に着いた。

石油王の父だけどさ、家は割とメジャーなアパートの3LDKなんだぜ？

ガチャ、と鍵を開けドアを開くいつもの癖である言葉が、反射的にでる。

「たっただいまあゝ」

返事はなく、只々虚しく言葉が反響するだけ。

ここでようやくオレは気づいた。

「……と…。そっか、もう言う必要もねーのか…」

1人暮らしだもんな、と付け足す。

一瞬だけ、寂しい感じもした。だけど、オレは悲しんでいられるほど恵まれてもいない。

それに、幸せでもない。

お金があっても、愛などない。

メイドが居ても、楽しくない。

友達が居たって、上っ面だけ。

だから――…。

「まっ♪ ポジティブシンキングだな♪」

自分の居場所は、自分で作る。それが正しい生き方なんだ。所詮、この人間社会に居場所などないんだから。

「ん…？ 電話が…」

ブルルルル…。電子音で一定リズムのこの音は、人を急かす能力があると思う。

ホラ、オレも今走っているし。

「はい！ もしもし――…って、ファックスかよ…」

慌てて損した。

オレは思わず舌打ちをもらす。

…と。

「んっ？ 何だよ、このメモ」

電話の近くにある冷蔵庫に張ってあったメモ用紙は、カラフルな

他のメモ用紙に似合わず、シンプルなもの。
やけに目立つそのメモ用紙に書いてあった文字は、紛れもない母
の字。

「……暗…へ？ ンだよこれ…。？私は死んでいるでしょう。です
からコレを残します？って…」
何思ってたんだよお母さん…。だって事故死で…。

——人は、予知なんかできねエんだぜ？

そのとき、オレは思い出した。
昔、母がおかしなことを口にしたことがあった…と。
確か…こう言っていたんだ。

『さつきちゃん…事故、残念だったわね…』

そのとき彼女はまだピンピンしていて、事故死したのはその夜の
こと……。。

それに、オレが遊びにいくとした日。
デパートには行くな。と言われ…。

その日、そのデパートはテロに遭い…数十名が亡くなったらしい。

…そういえば母は要領がとてもよかった。
それはまさに、？未来を知っている？かのように。

「……まじかよ……」

オレは気づいた。
母の言葉の――…

――本当の意味に。

『ピ――。イタリア カラ ファックス ヲ ジュシン シマシタ』

第1話 … と言つ名のプロローグ後半（後書き）

イタリアなのは勿論リボン愛してるから

↑

これまで読んで下さりありがとうございます♪

それではまた〜^^

第2話 プロローグにしか見えない本編（前書き）

み…短ッ…

第2話 プロローグにしか見えない本編

「来てしまったぜ……伊太利亚……」

イタリア

辺りを見渡せば、鼻が高い金髪や、綺麗な栗色の髪をした女性ばかり。

改めてココが外国だと言っていることが分かる。

……ん？

ああ、何でココに居るかって？

その話については、昨日の夜まで遡るんだけどな――

——始まりは、一枚のファックス用紙だ。

『イタリアって…何でイタリアからファックス届くんだよ…』

疑問に思ったオレは、恐る恐る？ソレ？を手に取ったんだ。
…そしたらさあ。

『ふわっ…んだよ…コレ……イメージ…？ テレパシー…？』

紙が光って、それで頭の中に知らない人がこっちを向いて微笑んでいたんだ。

金髪に緑色の目をした綺麗な女の人。

腰まである髪はサラサラしたストレートで、少なからずオレの知っている金に塗れた汚い人間とは、違う感じがした。

『え…っ！？ ？待ってるから？？ それはどう言う…ん？ ？ p
e r t u t t i ？？ 何なんだよ…』

このとき、オレの頭に浮かんだのはとりあえずクエスチョンマーク。

だけど、心地いいような。優しい気持ちに包まれるような。そんな感じになった。

——プツンッ。

『…イメージ……切れちゃった…』

で、色々特定できそうな言葉は？ p e r t u t t i ? だけだろ？
まあこのご時勢ネットと言うモノがあるわけで…調べたんだ。
そんで出てきた意味は？みんなのために？とか？誰のためにでも
？とかそーゆー意味だった。

そこでオレは、イタリアについて興味を持って――

「――で、オレがここにいるわけだ！」

ん？

ハシヨリ過ぎだろ？

そんなこと気にすんなって♪

「とりあえず、知らない土地なら地図が居るな…」

おお、丁度いいところにフリマ（？）的な感じのが！
ちよつと小汚い商人のオッサンが売っていた地図を手に取り、

「すみませーん、これいくらでs」
「ペペロンチーノ！！」

「……」
「……」

——何語！！！！？

「あ……あの……やっぱいいです……ノット ウォントでs」
「ミートソース…… ナッポーリターン……！！」

いくら歩けど、その声は木霊している。

(……イタリアって……)

……何？)

忘れよう。

オレは何も見なかった。

うん。何も知らない。

何だかものっそイタイ人と出会ってしまった気がするけど、知らないぞオレは。

「あ…地図…」

手に入れて無いけど…まあ…。

「勘で何とかなるだろ♪」

なんとかなる。する。

それ、オレのモットーだから

「よしっ！ ではとりあえず進むか！」

止まっていたら、見つかるモノも見つからない、

走れメロス！

走れ自分！

——この時のオレは、気づいていなかったんだ。
オレをじとりと見つめる商人の視線に。

そして——

——これから自分の運命に、
さだめ

『どう思つよジョーカー？』

『ネーロ……。普通回線は盗聴されるからやめてつて言ってるだろ？
……面白い子だね。久しぶりに見たよ、あれほどの資質を持っている子は』

『同感だぜ。敵に回したらどうなるか……。考えただけでも恐ろしいっつーの』

『やっぱり、これほどの資質つて所は？あの人？の娘つてトコかな？』

『ああ。まっ、とりあえずは早いところ？per tutti？に連れて行くのが妥当だろう』

『そうと決まれば追いかけよう！ネーロ、あの子の場所を探つて僕に教えて！』

『了解ッ！^{ラジャ}』

第2話 プロローグにしか見えない本編（後書き）

許してくださいっ…ああっ！！

蹴らないでッ…そんな目で…見ないでッッ…！！

第3話 ようやく廻る、運命の齒車

「……………フウ……。……………案外イタリアって、広いんだな」

いかにもバカっぽい発言をしているのは黒木暗^{くろきあん}。

黒木財閥の娘だが、沢山いた兄弟達。そして両親などは亡くなっているため今や血を受け継ぐ者は遠い血を除き、暗だけ。

葬式の後にはFAX越しに受け取ったメッセージを探るため、イタリアに来ていた。

「う……さすがに……疲れた……」

走り始めて早1時間。全力疾走し続けるのは、自殺行為に等しい気がしてならない。

「とりあえず、人に聞くしか…ないよな。誰か…」

キョロキョロしてみると、ここが港だと言うことがよく分かった。まあぶっちゃけこんな所に居るのなんか、田舎者のおっちゃんだろーな…。

——と思ってたんだよ。

「おっ！ 人じゃん」 しかも割と歳近そう！」

暗の視線の先に居たのは、赤髪の男。

道の聞き方は…まあ分かんないけど、どーにかなるだろ。ジェスチャーとかでな！

「スイマセーン、エキスキューズミ」

声に気づいたのか？ 彼？ は振り向いた。

……いや、ぶっちゃけ振り向くだけならいいんだけどさ。男の人は…なんてゆーか、ドイケメンだった。

赤い瞳に赤い髪。着ている服は黒で揃えられ、ドクロ系のアクセ

サリをつけている。

どこを取っても、イケメンの要素しかないと思う。

「あ…あの…」
「？」

「へ…」
「pe？」

「ペペロンチーノ？」

「…」
「…」

（——何やっちゃってんのオレ！！！！！！？）

よりもよって、さっきのバカ商人と同じことを！！？

そう思っ て頭を抱えていたら、赤髪の男が笑い出した。

「クスッ…」

「ふえ？」

「あははははは！…！」

腹を抱えて笑ってる。

何が面白いのか聞こうと思ったら、まさかの向こうから返答が帰ってきた。

「ごっ、ごめんっ！ 実は僕、日本語分かるんだよ！」
「えっ…」

ついていけないノリで爆笑中。

どんだけツボってんの。

すると、ようやく落ち着いたのかオレの方を向いて、

「ちよつとしたジョークってことで、許してくれる？」
「……！」

笑いすぎて潤んだ瞳。

やばい。顔赤くなるの抑えられない。

「ん？ どうしたの？」

「いっ…いや…何でもねエ…」

照れる。恥ずかしい。

このイケメン国宝めっ！
↑

そうオレが照れていると、向こうから自己紹介してきた。

「僕の名前は？ジャック・ラルード？。皆からは？ジョーカー？
って呼ばれてるよ」

「ジョー…カー…？」

「そう！」

微笑んだ彼——もといジョーカーの瞳の奥に、一瞬悲しい色が見えたのは、きっとオレの気のせいだ。

「君の名前は何て言うの？」

「あつ…オレ…の、名前は……」

……どうしよう。

自分がワザワザ嫌っている黒木暗と言う名前を、こんなイケメンに言う気になれない。

それに——…

「アンタ…何者？」

「あ？」

「いや…さっきの商人と、同じ感じがしたから…」

そう。オレはそう感じた。

するとジョーカーはオレに掌を向けてきた。

「何？ ジョーカー？」

「凄いな…」

「ふえ？」

どこぞの悪役ちっくな台詞を呟いてきたと思うと、

「うわっ！…！？」

オレの周りにいつの間にか広がった、赤っぽい透明の四角い膜。
ブワツと沢山出てきて、そりゃあもうフェアリー・イルのヒビキ
の魔法のように。

「何…コレ…」

「僕的能力を見破った人は、初めてなんだよ」

そう言った後、赤い膜がジョーカーに向けて動き始めた。

「ジョーカー？」

薄い膜はジョーカーに張り付き、形づくられ…。

「なっ…!!?」

ジョーカーは完璧に、先ほどの商人になった。

「どうだい？ 僕の能力は」

怖い…。来るな…。

やめて…。

「君の能力は何？ ランクによっては早いトコ来てもらいたいんだけど…」

そんな簡単に、見た目を変えるなんて…。

変身できるなんて…。

そんなの、人間のできることじゃ…ねエだろ…。

「僕は一応Sってことになってるけど…って、え？」

「ひっ…」

オレは必死に、ジョーカーから離れようとした。

そして、強く地面を蹴ったんだ。

そしたら——…

「^」
「つ」
「…」
「？」

「おっ」

「によおおおおお！！！！！！！！？」

なんか分かんないけど、メチャ高くジャンプグーツしてました。

「危ない！！」

「って……言われてもっ!!」

事実、そんな高くジャンプする日が来るなんて思っても見なかった。

ジョーカーも想定外だったのか、瞳孔を丸くした感じでテンパっている。

「どーやって着地すればいいのおおおお！？」

涙をちよちよぎらせても、落下速度が遅くなるワケでもない。と、ごもつともな悲鳴を上げていたら、ジョーカーの声がした。

「能力を使えばいいんだ!!」

「……はあ?」

「着地できるように、足とか体とかに力を使って!!」

チカラって。

とある科学の超電^ビ●砲かよ。

「——ってそうじゃいよオレ!!? 何考えてんの!!?」

「一体どうしちゃったの君!!?」

ジョーカーの鋭いツツコミはさておき。

結構高く飛んだとはいえ、そろそろ真剣にヤバイ。

「助けて!! 助けてジョーカー!!!!」

「え……」

「頼むよ死にたくねエよオレが必要なんだから助けてくれよ!!!!」

オレの必死の言葉に気おされたのか、ジョーカーは「分かりました!!」と叫んでいた。

そうしている間にも、ヒュウウウウウウウ…と落下速度は速まっていくな。

「頼むぜジョーカー!!」

「ちよっ…待つ…!!」

トスツツ。

強く目を瞑っていたオレは、衝撃に構えていただけど…

「ん？」

気づくと落下する感覚もなくなっている…

「よかった」

「ふえっ!!」

世に言う、お姫様ダッコ状態だった。

「ジョー…カー、一体…どーやって…」

「ん？ ああ…多分、………まあいいや後で説明するよ」
「う…うん」

地面に下ろされながら思ったけど…。

案外ジョーカーって、面倒くさがりやなのかもな。
ハシヨリ方が尋常じゃない。

——つかそうじゃないよオレ！！
つつこむトコ他にある！！

「ジョーカー！！！！ 教えろ！！ 何だっただよさっきのは！？」
「え…さっきのって？」

「さっきのだよ！！ いきなりキャッツも真っ青なジャンピング
ッ とか何なんだよ一体！？」
オレがそう叫ぶと、ジョーカーはまたもや目を丸くし考え込んだ
素振りを見せた。

「……もしかして、君何もしらないの？」
「……………は？」

さっきまでヘタレな感じのフニャフニャキャラだったのに、いき
なり真面目な顔で聞いてきたからちよつと焦った。

…ってなんだよフニャフニャキャラって！！？

オレが心の中でバタバタしていると、ジョーカーが口を開いた。

「そっか…何も、知らないのか…」

「……」

「……」

すっげー思わせぶり！！！！！！

彼はいったい何なんだって感じたな。

どこぞやのマンガ的展開（笑）

「おっけー！　じゃあ…ネーロ居ないし分からないけど、僕の見ただとBよりは上みたいだし…。試験には受かれると思うし、とりあえず？　p e r t u t t i ？　まで行こっか！」

「ペ…ル…トウツ…テイ？」

伝わったイメージと、同じ言葉。

「それに、Bとか何なの？　教えろよジョーカー」

「詳しいことは車の中で話すよ」

ジョーカーが向いた方向には、赤い車。

早く詳しいことを聞きたいオレは、ジョーカーの手を引き走り出した。

『早く来ないかしらね、あの人の娘さん』

『久々に見た気がするな、お前の心からの笑顔』

『いつも笑ってるわ』

『はいはい』

第3話 ようやく廻る、運命の齒車（後書き）

最後の何とか思わないでッッ…

次の次の次くらいで分かります！！（長エよ

ああっ痛いッッ！！

そんな叩いたってッ、私は自重など持って無いッッ！！↑

ここまで読んで下さりありがとうございますッ
それではまたッ

第4話 何やってんだよジョーカー!!! (前書き)

お気に入り登録、ありがとうございます！

第4話 何やってんだよジョーカー！！！！

「なあ。ジョーカー」

とある国道を走る一台の赤い車。

端から見ればイタい車かもしれないが、しかし中に乗っている人によつてイタくもなんと無くなくなってしまうのが人間の薄情差だ。

右側の助手席に乗る、藍色の髪を後ろでポニーテールとして束ねている、容姿で言えば上の中くらいの少女——黒木暗。

左側の運転席に乗る、赤い髪をした男にしては長い髪 of 青年、容姿でいえば上の上は余裕で言ってしまう彼——ジョーカーこと、ジャック・ラールド。

昨日の夕方から走り始めているにも関わらず、今はお天道様がサンサンと日を出している。

車についている小さな画面には『7:42』とあるが、時差ボケのせいか暗はまったく眠そうではない。

「ん？ 何？」

ジョーカーは（当たり前だが）前を見ながら答える。

「いやあ…あの〜、力とかって…ナニ？」

「……あ、ああ。そのことか」

暗の苦笑いまじりの問いかけに対し、ジョーカーは忘れていたらしく「ははは…」と笑っている。

——と。

「君はどこまで知ってるのかな？」

「へ？」

どこまでと言われても。暗は思う。

そもそも基準もよくわからない。

「う…う…」

「あつ、ごめんごめん！ えと、質問変えるね」

混乱している暗に謝罪をし、ジョーカーは言葉の通り分かりやすい質問に変えた。

「君は、世の中にESPが存在することを、知っているかい？」

「……」

「……………どうしてそんなに遠い目で僕を見るのかな？」

分かりやすく『ああ、電波だ』と言う痛々しい暗の視線に対しま
たもや苦笑いをし、ジョーカーは言葉を続ける。

「や、うん。知ってるよ？ ジャッポーネ 日本ではまだ？超能力など存在しない
？ってゆー文化があるって聞いてるけどさ、でもホラ、一応聞いた
だけだから」

もう一度「はははっ」と笑う。
声だけ聞いていたら日本人が間違えるくらい発音も笑い声も綺麗
だ。

「うむ…。分かった。要するに、ジョーカーの言うことに常識は通
用しないんだな」

「なんかイヤな言い回しだな…ま、そう言うことなんだけどね」

するとジョーカーは唐突に指を出し、パチンツ。と鳴らした。

「え——！？ うわっ！？ 何だよ！？ ちょっ、待っ！！」

その瞬間、聞こえてきたのは暗の悲鳴。

まあ、暗の立場に立ったとしたら…その反応をするのが当然かも
しれない。

驚かないのは赤ん坊か、よっぽどの世間知らずか、それかハリ
ポットポットの見過ぎだろう。

「昨日見たでしょ、そんなに驚かなくても」

「たった一回で慣れるか——！！！！」

なるほど、ジョーカーは案外マイペースなんだ。

暗は思う。

だけど——確かにコレは慣れないとダメらしい。

「赤い膜……ケータイの画面くらい……昨日よりずいぶん小さいな」

「昨日は変身するためだったから。パソコンの画面くらいは必要いと、体を覆いきれないんだよ」

目の前に突如現れたのは、またもや赤い透明の膜。

「ええと……説明って難しいな……。まず本当に基礎だって知らないんだよね？ うーん……」

考え込んでしまうジョーカーをしばらく見てみると、ふいに眉毛がピクリと動いた。

「準備オツケー！ 前の画面を見てね」

——ここはどこぞの遊園地のアトラクションか。

そうツツコミしたくなるのを必死に抑える暗であった。

【暗Side】

「うおっ！？　なんか出てきたぞ！？」

「疲れるからカラーは勘弁してね。今回は白黒で。…あ、ESPって超能力のことだから」

そう言ったすぐ後。赤い幕には白い背景が映し出され、黒い文字が映し出されていた。

勿論、日本語で。

「まず…この世に存在するESPは二つの種類があるんだ」
棒人間のようなモノが二つ、映し出される。

「普通のESPは人に害を与えることができない。そして人を直接幸せにすることもできないんだ」

片方の棒人間が動き出し、隣の棒人間に手を向ける。
すると片方は吹っ飛ばされ……なかった。

そして今度はさっきの手を向けた棒人間がハートを差し出した。
もう片方は幸せに……ならなかった。

まあそーゆーことだろう。ものっそ分かりやすい。

「その種類は様々で、僕のように？情報伝達能力者？や、君達で言うテレパシーを使う？意思共同能力者？他には？接触感应能力者？とかがいるかな…」

難しい顔をしたままのジョーカーを片隅に、画面を見ていると色々図が出てきた。

図のセンスがある…くそつ。世の中美術的センスのある奴等ばかりか。

…ん？

オレはどうなのかって？

……………聞くなよ。

「ここまで、何か分からないことはある？」

「あつ、うん。特にないぜ？それで、普通じゃないESPって何なんだ？」

オレがそう言うと、ジョーカーは下を向き黙りこくってしまった。ああ、今は信号だから大丈夫なんだぜ。

「…僕も含め、害を与えない能力を持つ人達は、お偉いさんのエリート警察に保護されるんだ」

え、イキナリ話しが…。

「その能力を警察の仕事に使わせられる。勿論、エリートとして」

「…超能力は、みんなが手に入れられるモノなのか？」

「いや、血縁者のみ手に入る希少な力だよ。強さは人それぞれだけど、ある程度は遺伝で決まるらしい」

青になった信号に合わせ、エンジン音が鳴る。

車の座席からの振動は大きいけれど、それ以上にジョーカーが震えている気がした。

「そのせいで——は…」
「えっ？」

オレの言葉で正氣に戻ったらしい。

すぐに取り繕った笑顔でオレに笑いかける。

「ごめんごめん。ちょっと関係ないことだったね」

「あ…うん。大丈夫、気にしないで」

ジョーカーの瞳の奥の闇は、多分オレには一生理解できないモノのような気がした。

「まあとにかく、オレやジョーカーは希少な能力の持ち主ってことだな」

「スツキリまとめちゃえば、そーゆーことだね」

交差点を右に曲がると、商店街のような場所に出た。

コンビニのような場所に人だかりができている。

「にぎやかだな。何かのパレードか？」

軽い冗談をかましてみるも、

「いや…今日は特に何も無いハズなんだけど…」

ジョーカーはそれどころでは無いらしい。鋭い目でコンビニを睨んでいた。

「…何かありそうなのか」

「まだ分からない…。でも、もしかしたら警察が必要かもしれないね」

さっきの言い回しだと、ジョーカーは警察に関与している人物——

こーゆーのは慣れているのかもしれない。

何か感じ取ったのかもな。

「ちょっと見てくる。危ないから君は車にいて」
「……………は？」

何言ってるんだこの優男。

「いや…『は？』って言われても…」
「目の前に居る人が危険なところこうしてるのに、オレだけ待ってろってか？」

（——この子…）

「冗談キツいぜジョーカー。悪いが…オレは親から口うるさく『女の子は女の子らしくあれ』って言われてたほど、筋金入りの肉食系女子なんだ」

（…似てる）

「分かったなら、オレも連れて行ってくれよ」

（口調だって、性格だって違っのに…）

「だいじょーぶ、邪魔はしないからさ！」

『大丈夫、邪魔はしないから』

「……」

「どーした？」

「……」

「ジョーカー？」

「……」

「ジョーカー、ジョーカー!!」

いきなり放心状態になられて困るけど、次はデコピンするから心配無用。

「ていッッ!!!!」

「うぎゃっ!?!」

痛そうに額を涙目で押さえる。

「不意打ちは酷いよ……」

「ならボーッとすんなよな」

オレが冷たく言い放つ。すると言い返せなくなったのかプイツと顔を背けてしまった。

そして窓を見つめながら

「と、とにかく！ 希少なESPの一人である君を危険な目にあわせられないきやら！！」

よっぽど必死だったらしい。思いっきり噛んだが、それを言わないのが一応オレの優しさ。

とゆーか、一部気になるところがあるし… ジョーカーが死ぬ前に聞いておこう。（ここで死んでしまったら話が終わってしまいま
すよ暗さん）

「つーかESPって、そんなに少ないのか？」

「うん。1つの国に一族がいるかいないか。要するに、国は確か195ヶ国だったハズだから、一族5人と考えてざっと975人。でも誤差とかあると思うから70億人中、1000人くらいだと思う」

おお、ジョーカーは頭がいいらしい。

そう思ったが、どうやらタネがあるみたいだ。

いつの間にか小さな赤い膜をまた出していて、そこに計算式が書いてあった。

筆算の式が書かれているところから考えると、多分電卓のようにには使えないっぽい。

ジョーカーの頭で出したものを書いているみたいだ。

「でもね、最近ESP関与の事件が増えてるんだ」

「ESP…関与…」

「しかも、ESP同士の命の狙い合い」

空気が凍る。

「……」

「……あつ！！ 僕は君を殺そうとしないからね、絶対！！！」

「ならよかったぜ」

まあ確かに殺そうとしてたら昨晚キャッチしてくれないだろうな。
てゆうか…

「コンビニは？」

「あつ！！ 忘れてた！！！」

「忘れんなよ！！！」

慌てて車を出て行くジョーカーの後を追おうとすると、再度強い
目で「来ちゃダメ」と言われたため、さすがにオレは身を引いた。

「ちよつと行って来るから、待っててね！」

軽い雰囲気の間接し、足早に車道を横切りコンビニへと向かっ
て行った。

途中何度か車に轢かれそうになりながら…。

……とまあ、オレはこんな楽しそうなことを遠目で見てい
るほ
どいい性格のヤツじゃねエな。

「よっし、ジョーカーはコンビニ入ったし。オレは出ても誰もわか
んねーな」

ガチャリ、とドアを開ける。

「しゅっぱーっ！」

ジョーカーのように轢かれそうにはなんねーぜ！

スタスタと車道を通り、騒がしいコンビニの人混みの中をかきわける。

すると見えてきたのは…

「え…？」

拳銃を握り締め、人質をとっている覆面の男。

その人質は——…

「何やってんだよジョーカー！！！！」

ジョーカーだった。

『中々こないっちゃ。ジョーカー…』

『まあ、アイツのことだ。またカッコつけて失敗してんじゃねーの』

『あなたたち…ジョーカーのキャラ間違えてない？』

第4話 何やってんだよジョーカー！！！！（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございました！・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1987y/>

Sensitivo

2011年12月18日15時49分発行